

大学教育充実には校友会の力

大学教育の充実のために同窓会・校友会の支援が欠かせなくなっている。立命館大学校友会の村上健治会長（元大和ハウス工業社長）は、校友会の支援を受けた学生が校友になって後輩を支える循環型支援の拡大を目指すという。



村上 健治

立命館大学校友会会長

習得した知識・技能を正確に再生する能力を有した人材から、知識・技能を活用してグローバル社会で多様な人々と協働しながら最善の解を追求していく人材へ。

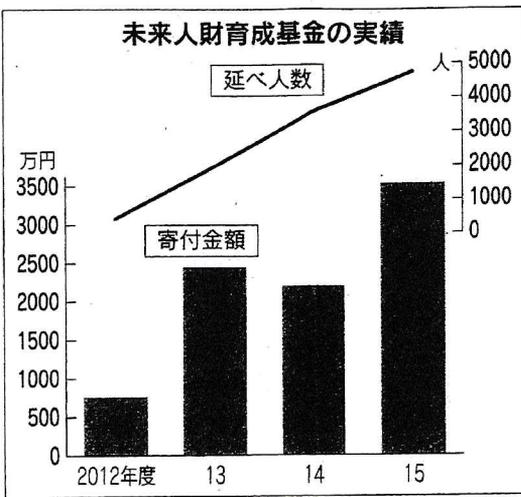
グローバル化や知識基盤社会の進展に伴って、社会が必要とする人材像は急速に変化しており、

人材育成を担う大学はこうした変化への迅速な対応を迫られている。

そこで各大学は、従来の受動的な学びから、アクティブ・ラーニングなどの能動的な学びへと教育の質的転換を図るとともに、日本人学生の海外留学促進や海外からの留学生の受け入れに取り組んでいる。

ただ、こうした取り組みはコストがかかる。アクティブ・ラーニングの効果的な展開には、学生が自由に学べる空間（ラーニング・コモンズ）などの施設整備が必須だし、海外留学の促進や留学生の受け入れには多額の奨学金の準備が必要である。収入の大半を学費に依存する私立大学は安易な学費値上げはできず、限られた収入の中で対応は容易ではない。学生にとっても問題は

後輩支援 循環型に



深刻だ。「私立大学学生は、その役割を明確にし生活白書2015」(目で、効果的な母校後輩学本私立大学連盟)による生支援策を講じていかねど、学生の海外留学へのばならない。

興味・関心は低くないが、このような観点から、実際に留学するのは8・3%。最大の障壁が「留業生・修了生で構成する学資金がない」(48・8%)ことだ。

立命館大学・大学院の卒業生・修了生で構成する立命館大学校友会(約35万人)が、母校と課題を共有しながら取り組んでいるのが「校友会未来人財育成基金」の募集推進事業である。一口千円から毎月継続的に寄付をし、集まった寄付を母校の改革課題に合わせて活用すること、積極的に大学の最前線に母校の改革を支えていく「テークホルダー」として、取り組みだ。

2012年度から始め

毎月千円から寄付募る ■ハコモノよりヒトに

た制度だが、個人による恒常的な寄付文化が根付いていない日本では、逆風下の船出だった。趣旨に賛同する校友は少なくないのに、実際に寄付をしてくれる校友の輪はなかなか広がらない。

転機となったのは、1人の女子学生の活動だった。彼女は11年にボランティア活動で訪れたケニアで、貧困が理由で生理用品を買えない女性たちに出会った。生理の度に授業を休み、勉強が遅れて退学を余儀なくされ、安定収入が得られる職業に就けず、貧困から抜け出せない女性たち……。

衝撃の現実を前に「この負の連鎖を断ち切るために、学生の自分のできることは何だろうか」を考え抜いた彼女は、日本とケニアを行き来し、支援者を募りながら現地女性たちと力を合わせて布製の生理用品を作って配り、教育機会を保障する行動を起こした。

15年1月、卒業前の最後のケニア訪問にあたり、彼女は校友会に渡航費の支援を依頼した。彼女の活動に感銘した校友

は、この女子学生のよ友が増えることを実現するために「信念に基づいて果敢に未来を切り開こう」という学生を支援しよう」と決めた。

これ以来、私たちは母校が学生の主体的な学びの醸成を目的に運営する「+R個人奨励奨学金」に資金を提供し、主体的な活動に取り組む学生の成長を支援することに力を注いでいる。15年度にはインドのスラム街で、子供たちが描いた絵をインターネットで販売し収益金を還元する自立支援活動に取り組む学生など、学生83人に奨学金を授与した。

こうした成果を可視化して、寄付者に意義を実感してもらう広報活動に注力したところ、少しずつ協力の輪が広がり、15年度には延べ約4700人から3千5百万円の寄付が集まった。20年度までに10億円を集めることが目標だ。

大学の所属は数年間だが、校友会は一生だ。母校を支援する校友を増やして、後輩学生支援を通じて次代の校友を育成することが、私立大学校友会の大切なミッションだと考えている。

「校友会未来人財育成基金」の募集推進事業は、集まった寄付を母校の改革課題に合わせて活用すること、積極的に大学の最前線に母校の改革を支えていく「テークホルダー」として、積極的に大学の最前線に母校の改革を支えていく「テークホルダー」として、取り組みだ。

「校友会未来人財育成基金」の募集推進事業は、集まった寄付を母校の改革課題に合わせて活用すること、積極的に大学の最前線に母校の改革を支えていく「テークホルダー」として、積極的に大学の最前線に母校の改革を支えていく「テークホルダー」として、取り組みだ。

■ ポイント ■

学んで良かった 思わせる大学に

寄付を継続することで後輩の支援をする……。こんな循環の確立が、多くの大学関係者が共有する夢だろう。

ただ、それには大学教育の魅力を高め、卒業生に「この大学で学んで良かった」と思ってもらうことが前提になる。学生の満足度をいかに高められるか、大学の真価が問われる。

現役時代に支援を受けた学生がOB・OGとなつて、少額でもいいから

(横)